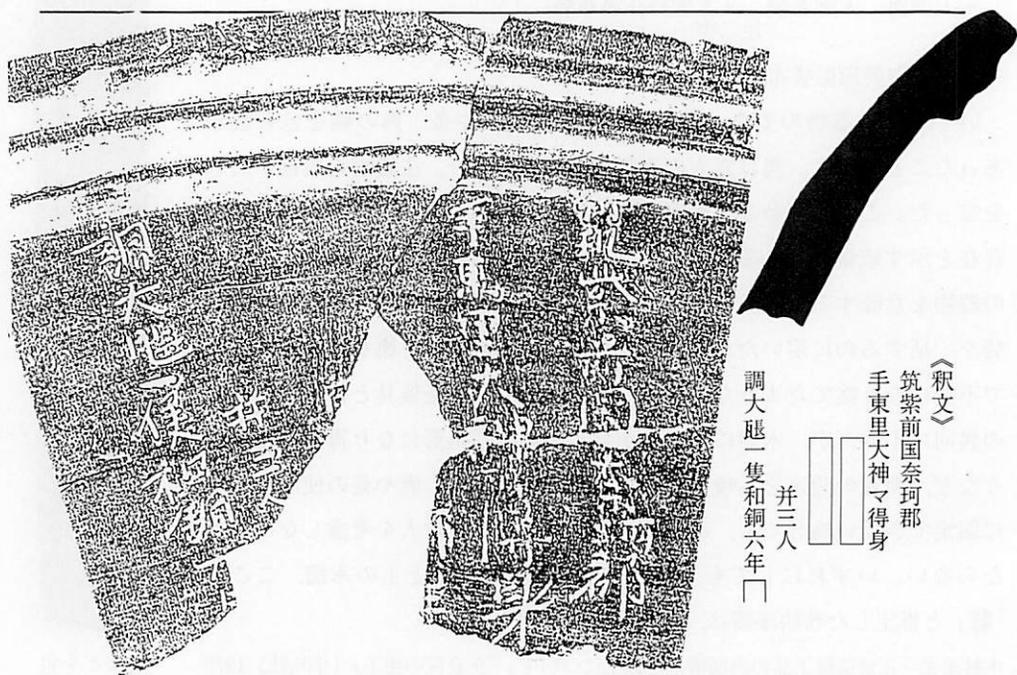


平城宮出土須恵器の産地調査(2)

平城宮跡発掘調査部

10世紀前半に編纂された『延喜主計寮式』には、須恵器調貢国として、筑前・讃岐・備前・播磨・摂津・和泉・近江・美濃の八ヶ国が掲げられている。主計寮式の内容は、どの時点の土器生産を規定したものなのかが問題となるが、平城宮出土須恵器には、備前・播磨・和泉・美濃国などの製品が認められ、主計寮式の規定は、奈良時代の遺制を色濃く残すものと考えられてきた。近年、福岡県大野城市所在の牛頸古窯跡から和銅六年の年紀をもち、「調大厠」とヘラ描きされた甕が発見され、筑前国の調貢を裏付けるとともに、調貢制度が奈良時代当初までさかのぼることも明らかになった。考古第二調査室では、従前から調貢国の須恵器の調査を行ってきたが、調査室メンバーの移動もあり、また各地の窯跡や官衙跡の調査が著しい進展をみせていることもあり、昨年度から再度調貢国の須恵器を調査することになり、本年度は筑前国を対象とした。大野城市教育委員会・大宰府市教育委員会・九州歴史資料館の協力をえて、牛頸古窯跡、そこから供給を受けた大宰府・同条坊跡出土須恵器を調査し、筑前国の須恵器の特徴を把握することができた。中でも注目されたのは、前述のヘラ描き甕であり、荷札木簡と同様な記載法をとり、主計寮式規定の畿外諸国の甕一口にかかる正丁数も一致を見る。(巽淳一郎)



牛頸古窯跡出土ヘラ描き甕(1:2 大野城市教育委員会提供)